

Title	熊本震災への対応：シンポジウム「被災地における人々のケア～宗教者の役割とその連携の可能性」報告
Author(s)	篠原, 祥哲
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(1), p. 41-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60614
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

熊本震災への対応

—シンポジウム「被災地における人々のケア
～宗教者の役割とその連携の可能性」報告—

篠原祥哲*

SHINOHARA Yoshinori

2016年4月の熊本地震発生から8か月が経った12月5日、熊本大学黒髪キャンパスを会場に「被災地における人々のケア～宗教者の役割とその連携の可能性～」(以下「熊本シンポジウム」)が開催された。本稿は、この熊本シンポジウムの報告を行うものである。

1. 注目されつつある宗教者の災害対応

1995年の阪神大震災以降、宗教者による災害対応は注目を集めている。とりわけ、東日本大震災においては、宗教者の多様な役割が認識されてきている。宗教者は応急対応、復旧、復興の各局面において人、モノ、金、情報等、宗教が持つ社会的な資源を活用して幅広く震災対応に取り組んでいる。応急対応時における飲料水・食料・日用品などの物資給与や避難所としての宗教施設の提供、義援金などの資金援助、また宗教の独自性を発揮した支援として火葬場における読経や慰霊、そしてご遺骨の一時的な保管なども行われている。さらに宗教者のより公共性の高い取り組みが求められるようになり、それへの対応として東北大学で実践宗教学講座が開設され、震災対応時などにおける宗教的ケアのあり方の研究・教育が進められ、避難所や仮設住宅などで傾聴活動を行う臨床宗教師の育成が行われている。こうした宗教者の取り組みは、この度の熊本地震においても様々な場面で実施されている。

* (公財)世界宗教者平和会議日本委員会(WCRP)日本委員会・平和推進部長・
y.shinohara@wcrp.or.jp

2. 熊本復興宗教者支援連絡会

この熊本シンポジウム開催の契機になった事業として7月26日、熊本市国際交流会館で開かれた「熊本復興宗教者支援連絡会」がある。この連絡会は、宗教者災害支援連絡会（宗援連）、SeRV、新日本宗教団体連合会（新宗連）、九州臨床宗教師会、公益財団法人世界宗教者平和会議（WCRP）によって主催され、熊本の復興に取り組む宗教者60名が参加した。連絡会では、宗教者による緊急支援の状況が報告され、また宗教者と他のセクターとの連携を探るため、熊本県健康福祉政策課、被災地障害者センターくまもと、被災地NGO協働センターから行政、障がい者支援、災害ボランティアセンターの活動状況について説明を受けた。震災から3か月経ち、緊急応急対応時から復旧期に移行する中で、被災者の方々の支援ニーズが多様化していることや社会的弱者への支援が脆弱な状態である状況が報告された。さらに、上智大学の島菌進教授、大阪大学の稲場圭信教授らから東日本大震災の経験から心のケアや行政等との連携において、宗教者の支援活動に大きな可能性があることが示された。

3. 熊本シンポジウムの目的

熊本復興宗教者支援連絡会によって被災現場や災害弱者支援において宗教者間の連携した支援活動が一層促進された。そして避難者の方々が避難所から仮設住宅へ移動された10月頃から熊本シンポジウムの開催準備が始められた。複雑化する支援ニーズに対応するために、より実践的な学びと宗教者間の活動状況の共有を図るために熊本シンポジウムの開催の必要性が高まったのである。

この熊本シンポジウムは、熊本大学大学院社会文化科学研究科交渉紛争解決学領域、九州臨床宗教師会、世界宗教者平和会議日本委員会の3団体の主催によって開催された。阪神・淡路大震災、東日本大震災の経験を参考にし、これまでの宗教者の熊本地震対応を振り返りつつ、被災地における人々のケアという観点から今後の宗教者の支援活動の可能性や行政・NGOなどの各種団体との連携のあり方を考察するのが目的である。

4. シンポジウムにおける議論

始めに開催挨拶に立った熊本大学大学院社会文化科学研究科長の伊藤洋典教授は、復興における心の問題に対する取り組みの必要性を語り、今回、熊本大学の交渉紛争解決学が主催を担っている背景として、交渉紛争解決は心の葛藤を中核的な研究対象としているためであり、まさにこのことは心の問題であるためであると説明した。そして、シンポジウムでこの問題を議論する宗教者に期待したいと述べた。

宗教者の実践的な領域と大学機関の学問的な領域との連携は、その重要性が認識されているにも関わらず、余り深めてこられなかった。今回は交渉紛争解決というより実践的な学問であることに加えて、伊藤教授とこのシンポジウムを熊本大学側から熱心に進めた同研究科の石原明子准教授の宗教活動への理解と期待があったためである。

開会挨拶の後、熊本地震の被災者支援を行っている九州臨床宗教師会の國友朋子師（円行寺住職）、小泉基師（ルーテル健軍教会牧師）、内古閑信暁師（真宗大谷派専福寺僧侶）が支援活動を通しての経験を報告した。

國友師は九州臨床宗教師会が震災直後から避難所で頻繁に実施している宗教者による移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」を紹介した。被災者から「話を聴くだけで被災者の心が前向きに変化した」という言葉を頂き、傾聴活動のニーズの高さを感じたと述べた。

小泉師はルーテル健軍教会が避難所となったことから、多く被災者と避難生活をおくった様子を詳細に報告し、「教会を解放した体験から、寝る場所と食事の場所を変えただけで生活に張りが出た」、「一緒にテーブルを囲んで食事することで人間関係が良好になる」などの実践活動から得た教訓を発表した。

内古閑師は真宗大谷派で TEAM 熊本を組織し、緊急支援として避難所における炊き出しの経験を語った。炊き出しの数が実際の避難者数よりも少なく、避難者に食事を配れなくなり、居た堪れない気持ちになったことを吐露し「僕はやり遂げてる気持ちなんて全くない」と述べた。

この3名の報告から宗教者の支援活動の特徴の一端が表れているように思われる。1 つは傾聴活動の重要性である。宗教者は説法や説教を行うなど発信者としてのイメージが強いが、災害時に被災者の方々から喜ばれる

のは「聴くこと」つまり「傾聴」であるということである。

次に、宗教者が大事にしていることとは、避難生活の中でも食事や就寝といった日常生活におけるコミュニケーションであることである。日常生活の中でさり気なくコミュニケーションの工夫をし、人間関係を円滑にするというのも宗教者支援の特徴と思われる。

さらに、最も宗教者の支援として重要なのが支援者側の心の持ち方である。ともすれば支援者の視線が「支援してあげる」になりがちであるが、「支援をさせて頂いている」という謙虚な姿勢を意識していることである。こうした支援のあり方は、宗教者の支援活動でよく見受けられる特徴である。

基調講演では、東北大学の鈴木岩弓教授が東日本大震災時における宗教者の役割について講演した。東北大学実践宗教学寄附講座から臨床宗教師が誕生するまでの経緯や宗教者と臨床宗教師の違いについて述べた。また、生の世界への道しるべはあるが、死の世界への道しるべはなく、これからの超高齢多死社会では宗教者の役割が重要と指摘した。梅棹忠夫（国立民族学博物館 初代館長）の観点を引用し、仏教や神道、キリスト教など完結した論理を持つ教団をメーカー、宗教者（僧侶・神主）をディラー、信者をユーザーと考えると、ディラーはメーカーとユーザーを取り持つ大事な役割があると結んだ。

これまで宗教者の独自性を発揮しながら熊本の被災者支援に取り組んでいる九州臨床宗教師会のメンバーは東北大学実践宗教学講座を受講した宗教者である。このように東北大学実践宗教学講座では、宗教者としての救済のあり方の理論面と実践面から研究し、それを活用した育成活動を行っている。この講座を受講する中で宗教者として一層の救済方法が磨かれ、また様々な宗教者による連帯活動を生み出した。さらに活動の基盤となる被災者に寄り添うための精神的な心構えも受講者に醸成しているのである。

この基調講演を受けてパネルディスカッションが行われた。大阪大学の稲場圭信教授、寺院デザインの薄井秀夫氏、熊本大学の高橋隆雄名誉教授の3名がパネリストとして登壇し、熊本大学の石原明子准教授がコーディネーターを務めた。

冒頭、石原准教授は、世界保健機関（WHO）の健康の定義に身体的健康、精神的健康、社会的健康に加えて「スピリチュアルな健康」が含まれている

ことを紹介し、紛争でも災害においても人々のケアにおける宗教者の役割は欠かすことのできないものであると述べた。そしてこのディスカッションでは人々のケアに対し「宗教者でもできること」、あるいは「宗教者だからこそできること」を念頭においた議論を進めていきたいと語った。

稲場教授は2015年3月、WCRP日本委員会、宗教者災害支援連絡会（宗援連）、宮城県宗教法人連絡協議会（宗法連）の3団体によって開催された第3回国連防災世界会議パブリックフォーラム「防災と宗教」シンポジウムで採択された「防災と宗教」行動指針を紹介し、これに基づきながら今回の熊本地震における宗教者の震災対応を報告した。この「防災と宗教」行動指針は東日本大震災の教訓をもとに、防災の取り組み、災害時の緊急対応、復旧・復興期の役割、行政との連携、社会との開かれた関係構築などの観点から災害時における宗教者の役割を提示したものである。稲場氏は宗教施設を通して過去の災害記録を伝承していくこと、全国的に行政と宗教施設の災害時における連携が広がっていること、日本の4割ほどの市民が災害時における宗教施設が避難所や物資の集積所としての機能を期待していることなどを発表した。そして熊本地震でも明らかであったように、災害時に宗教者が行政や地域の人々との連携が適切になされる要因として、日頃から顔の見える関係づくりが行われていることが重要であると語った。

薄井氏は、人々と「死者」の関係づくりに宗教者の本質的な役割があると語った。それは人々にとって受け入れがたい「死」を、宗教者は様々な宗教教義を学び、修行という特別な自己鍛錬を行うことによって、「死者」との向き合い方を認識しているのではないかという人々の宗教者への期待がある。葬式を執り行うことに代表されるように「死者」との関係づくりにおいて、人々と「死者」との間にある物語を紡ぐことに重要な役割が宗教者にはあると述べた。

高橋名誉教授は、「死を活かす：災害で愛する人をなくした人へのケアの一つのあり方」というテーマで被災地のケアについて論じた。愛する人をなくした人へのケアとして傾聴、共感といった心理的なケアが必要であるが、最も核心的なケアは遺された者と死者との関係を立て直すこと、あるいは新たな関係を築くことであると語った。こうした関係づくりに宗教者は、宗教心と宗教共同体の実践によって宗教的真理を実現することでその役割を果たせる可能性があるかと報告した。

その後、鈴木教授も加わり、パネルディスカッションが行われた。その中で中心的に議論がなされたのは、石原准教授より投げかけられた「宗教者でもできること」、あるいは「宗教者だからこそできること」である。

「宗教者でもできること」に関しては、本シンポジウムの最初の宗教者3名の支援報告や稲場教授の発表の中で紹介された代表的な事例がある。行政と連携した災害ボランティアセンターの立ち上げ・運営の協力、避難所の提供、炊き出し・瓦礫撤去・傾聴などのボランティアなどがある。こうした取り組みは宗教者以外の人々・団体でも実施されている。一方、「宗教者だからこそできること」では、基調講演の鈴木教授、薄井氏、高橋名誉教授などが述べたように、宗教的教義・儀式などを活用した宗教的ケア、弔い、葬式、宗教的真理の実現などは、いわば宗教者ならではの特性を活かした取り組みと考えられる。

フロアも交えたパネルディスカッションでは、宗教者でなくとも宗教者以上に被災者の方々に共感しようと努力されている方も存在しているように、重要なのは一人の人間としての姿勢のあり方であるという意見が表明された。一方、宗教教義を習得し厳しい宗教的な修練を積んできたとの認識から宗教者への人々の期待もあるとの意見も発表された。このような議論を行うことによって、災害時における宗教者が果たすべき役割の意味をより深く探求し合った有意義なパネルディスカッションとなった。

閉会挨拶に立った九州臨床宗教師会の吉尾天声会長は「私も疑問を感じながら宗教者という者の立ち位置、あるいはその在り方、宗教者にしかできないことは何か。一方で自分は人間であると。しかもそれがいろんなかたちで歩む中で、いろんな救いを感じ、(中略) どういうかたちで被災地の現場に足を踏み込み、そこで何を感じていくのかという原点」を改めて感じたと語った。

地元熊本の宗教者として地震発生以来、被災者に寄り添い続け、共に支え合いながら生きている吉尾会長の悶苦ともいえる苦悩の発露に、支援にのぞむ宗教者のあるべき姿勢を垣間見た。このシンポジウムで得た知見をもとに、今後も宗教者による熊本復興支援を地道に取り組んでいくことを、参加者で共有し、シンポジウムが終了した。